

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol.13 No.1
 発行人 武田 秀章
 編集人 大東 敬明
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0104
 FAX (03) 5466-9237

日本文化研究所 平成三十一 / 令和元年度事業計画①
デジタル・ミュージアムの運営
および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信

本プロジェクトは昨年度に終了した「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」事業を発展的に継承するものであり、本年度から三ヶ年のプロジェクトとして事業を推進していく。主な内容としては、平成二十一年度に本格的に運用を開始した「國學院大學デジタル・ミュージアム」(http://k-anc.kokugakuin.ac.jp/DM/)の円滑な運営をはかり、デジタル・ミュージアム上で公開する独自コンテンツの作成を行う。なお、デジタル・ミュージアムについて、昨年度末段階で二十九データベースを公開しており、公開項目の総数は七一、五二二件となっている。また日本の宗教文化について研究を進めながら、それを教えるための教材についても研究・作成し、あわせて国際的な発信を進める。

デジタル・ミュージアムの運営について、教育への活用を視野に入れながら、研究開発推進機構の各機関と有機的に連携して推進していく。

また、これも各機関と連携しながら研究開発推進機構における研究成果や各種のデータベース等についてもデジタル化を進め、更に本学全体における研究成果発信の一環として、学部・大学院で構築したデータベース等を横断的に公開することにも対応する。

独自コンテンツの作成について、引き続き二十一世紀COEプログラム関連事業として構築した『Encyclopedia of Shinto (『神道事典』の英訳。以下EOS)の拡充を図る。また日本文化研究所が蓄積してきた研究成果や学術資産についても整理しながらデジタル化し、これらを主としてインターネットを通して国際的に発信していく。これと関連して、神道と日本の宗教文化に関する国際的なポータルサイトの構築を目指す。更に、本学の学術的な研究成果を英語に翻訳し、オンラインジャーナルとして公開することを計画している。

日本の宗教文化についての研究と

目次

- ◆ 日本文化研究所 平成三十一 / 令和元年度事業計画①
「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信」(星野靖) 1
- ◆ 日本文化研究所 平成三十一 / 令和元年度事業計画②
「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築 (齋藤公太) 3
- ◆ 学術資料センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画①②
「館蔵文化財の資料化と研究公開」館蔵史料のデジタル化と研究公開 (内川隆志) 4
- ◆ 学術資料センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画③
「神道祭祀・儀礼の研究と展示公開」(大東敬明) 5
- ◆ 校史・学術資産研究センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画①
「國學院大學における大学アーカイブス体制の基盤整備」(渡邊卓) 6
- ◆ 校史・学術資産研究センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画②
「國學院大學における学術資産研究の可視化」(渡邊卓) 7
- ◆ 研究開発推進センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画①
「研究開発推進センター研究事業」(宮本誉士) 8
- ◆ 研究開発推進センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画②
「二十一世紀研究教育計画委員会研究事業」
渋谷の都市形成と再開発に関する研究 (宮本誉士) 9
- ◆ 古事記学センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画
「古事記学」の推進拠点形成と世界と次世代に語り継ぐ
「古事記」の先端的な研究・教育・発信 (渡邊卓) 11
- ◆ 國學院大學博物館 平成三十一 / 令和元年度事業計画
事業計画・人事一覽 21
- ◆ 彙報 41
- ◆ 資料紹介「厩庇付書」 161

教材を国際的に発信していくことについて、引き続きデジタル・ミュージアムの機能を、広く大学教育・宗教文化教育に活用していくための取り組みを行い、ユーザーにとっての使い勝手の向上をはかる。研究資産を教材として展開させていくにあたって、平成二十三年に宗教文化士制度の運営を目的として発足した「宗教文化教育推進センター」と連携していく。また、日本の宗教文化についての英語教材を開発し、海外の研究者に利用してもらえるような形で発信していく。これについては、本年度も引き続き、平成三十年度に採択された科学研究費基盤研究(B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」

(RHO015、研究代表者：平藤喜久子) 事業とも協力しながらプロジェクトを進めていく。

一、デジタル・ミュージアムの運営
デジタル・ミュージアムの運営について、本プロジェクト担当者、研究開発推進機構の各機関のデータベース担当者、および図書館、広報課、情報システム課、ソフト提供会社の担当者からなる「デジタル・ミュージアム・ワーキンググループ」を組織し、システム全体の円滑な運営を図る。同ワーキンググループにおいて、運用上の課題を共有して改善を図り、利用者の利便性を高めていくための工夫や、スマートフォン対応を含めて教材として活用

するための方策などについて議論する。アクセス数(二〇一八年は年間で延べ八一五、〇〇八件であった)について定期的に共有・分析し、海外からの利用状況についても把握しながら、利用状況の改善を試みる。またデータベースの新規追加も随時受け付ける。

二、デジタル・ミュージアムの展開のための独自のコンテンツの構築
① 神道と日本の宗教文化に関するポータルサイトの構築

現在、デジタル・ミュージアム上において、日本文化研究所の研究成果としていくつかの英語のデータベースを構築し、公開している。主要なものとしては、まず前述のEOSがあり、EOSに附属する形で初学者用の神道入門ウェブサイト「Images of Shinto: A Beginner's Pictorial Guide 図説による神道入門」と「Chronological Supplement 年表」を公開している。他に双方方向論文翻訳データベースや、神道基本用語集などを公開している。また、旧日本文化研究所時代に作成した日本の宗教文化に関する英語論文などもウェブ上で公開している(例えば *Contemporary Papers on Japanese Religion* のシリーズ「*Matsumi: Festival and Rite in Japanese Life*」*New Religions' Folk Belief in Modern Japan*、*Kami* の四集が公開されている)。これらのコンテンツについて、以前より一覧性を備えたナビゲーションを構築する必要があると指摘されており、これを受けてポータルサイトを作成し、公開することを計画している。日本語・英語で作成

することで、国内外の学生が神道を学ぶ際に活用できるものとすることを目指す。また宗教文化教育のため作成した教材についても、ポータルサイトとリンクさせる。

② 過去の研究資産の整理・公開

日本文化研究所の過去の研究成果について、公開を念頭に置いて情報整理とデジタル化を進める。

二〇一七年度に研究開発推進機構は発足十周年を迎えたが、それ以前の旧日本文化研究所の五十年間を合わせ、遡って情報を集約して整理し、過去の催事や刊行物の一元的なリスト、年表などを作成する。これに合わせて、過去の催事の写真や動画なども集約し、アクセスしやすくなる形で整理していく。旧日本文化研究所が発行していた『日本文化研究所紀要』については既にDVDのデジタル版があるが、『日本文化研究所報』については、完全な目次のデータが存在していないので、まずこれを整備し、本文データのデジタル化を進める。

③ 研究成果の国際的発信

本学の研究成果を国際的に発信することを目的として、新たに日本文化研究所の発行による英文のオンラインジャーナルを創刊する。主要内容として、國學院大学の教員による日本文化に関する論文の英訳を掲載する。本学から刊行されている学術雑誌のなかから、日本文化研究に関するものを三本程度選定し、これらを英語に翻訳し、編集して、オンラインで公開する。

また、昨年十月にワークショップ的な形で開催した国際研究フォーラム「アジアの宗教文化―

―モダンテイの中での相互変容 Religious Cultures in Asia: Mutual Transformations through Multiple Modernities」に「*ICJ*」その報告書を作成し、成果を広く共有する。

三、宗教文化教育の教材研究の国際的展開

① 宗教文化教育の教材研究・作成

研究成果の教育への還元ということを念頭に置きながら、「宗教文化教育推進センター」と協力して、宗教文化教育の教授法と教材の研究を進め、また教材作成を行っていく。

現在は「世界遺産と宗教文化」、「映画と宗教文化」、「博物館と宗教文化」といったデータベースを公開しているが、それらの拡充を図ると共に、新たなデータベースの追加について議論し、設計・公開していく。また地図上に情報を表示させる形でのデータベースについては、以前からスマートフォンアプリ「ロケスマ」上での公開を行っており、これについても更なる拡充を検討する。

また、昨年度に刊行した『学生宗教意識調査総合分析(1995年度〜2015年度)』の英語版を下敷きにして、日本の学生の宗教意識について教えるための英語教材を作成することを計画している。

② 神道と日本の宗教文化に関する教材の研究と作成

科学研究費基盤研究(B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」事業で進めている海外の日本宗教関係の授業におけるニーズ調査を踏まえ、特に神道関連で必要とされる教材について検討し、教材として活用できる動

画素材の作成などを進めていく。これに関連して、宗教文化教育の教材研究のための研究会を開催する。広く国内外の研究者たちから事例報告を受け、議論を積み重ねるのに加え、生活の中で宗教文化がどのように関わってくるのかといったことを考えるため、実際に実務に携わっている方から話を伺う研究会も行う。後者について、六月二十九日に「生活の中で直面する世界の宗教文化―食・服装・忌避などへの理解」というワークショップを催行する予定である。

③ 教材動画のシステム構築

國學院大學デジタル・ミュージアムは、データベース内に動画データを含むことがシステムの可能であり、例えばEOSには百件を超す動画が含まれている。また、以前より日本文化研究所では、現地調査の際に動画を撮影したり、あるいは主催した催事の記録動画を作成したりしてきており、これらを整理しながらデータベース化を進めている。これらの動画資産と、新たに作成する教材用の動画などを含めて、国内外から広く利用してもらえるような公開のためのシステムを引き続き検討している。

四、日本文化研究所国際研究フォーラムについて

日本文化研究所は、研究所全体での催事として、毎年国際研究フォーラムを開催しているが、本年度は神道・国学研究部門が主体となって催行する。

日本文化研究所 平成三十一／令和元年度事業計画② 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と 国学史像の再構築

事業の目的と概要

平成三十年度より三ヶ年にわたって実施している本事業は、日本文化研究所の二つの研究部門のうち「神道・国学研究部門」の研究事業として行われるものである。具体的には以下の三つの目標によって構成される。

(一) 国学に関する学説史・研究史の整理を行い、最新の研究成果を反映した国学史像を打ち立て、それを一般社会に向けて発信する。

主要な発信の方法としては、通史形式による国学の概説書を作成し、出版することになる。前年度は学説史・研究史の整理をふまえ、概説書の構成と執筆担当案を策定した。

(二) 以上の作業と連動して、国学・神道関係人物のデータベースを拡充する。前年度は平成二十七～二十九年度の研究事業で構築した「明治期国学・神道・宗教関係人物データベース」を「国学・神道関係人物研究情報データベース」(<http://kanan.kokugakuin.ac.jp/jink>)と改称し、その修正・管理を行いつつ、近世中期から明治初期までの国学・神道関係人物を対象としてデータを追加した。また、関連する資料の調査のため、神宮文庫(三重県)と西尾市岩瀬文庫(愛知県)への出張調査を行った。

このデータベースは国学研究者に

とつての有益な研究のツールであるのみならず、作業の過程における研究史整理や人物情報の調査の成果を(一)に反映させている。

(二) これまでの事業で構築してきた国学研究のネットワークを拡張する。具体的には定例の国学研究会・社家文書研究会を行いつつ、学内外の国学研究者を招いて最前線の研究状況に関する公開レクチャーを開催する。前年度は計四回開催した。

さらに前年度は日英両言語で運営する双方向型のウェブフォーラムとして、フェイスブック・グループの「国学・神道・日本宗教フォーラム」を立ち上げた。今後国学・神道研究の情報や、研究所の過去の研究成果をグローバル規模で発信していく。

これらの公開レクチャーやウェブフォーラムにより、国内の国学研究の最新状況や、グローバルな国学研究の状況を知ることができる。そこで得られた知見も(二)に反映される。

本年度の事業計画

一. 近世・近代国学に関する研究史・学説史の整理と国学史像の再構築

(一) 前年度に引き続き近世・近代の国学に関する研究史・学説史の整理を行う。その過程で、従来の思想

史的な国学史像の問題点を洗い出ししていく。

(二) 公開レクチャーも参照しながら、二十一世紀に入ってからからの一次資料に基づく実証的な国学研究の成果に依拠し、新たな国学史像を具体的にまとめていく。国学史像の案は後述の国学研究会や「国学・神道・日本宗教フォーラム」において発表し、検討する。

(三) 前年度に策定した執筆担当案にしたがい、(二)においてまとめられた国学史像に基づき、国学の概説書の執筆を開始する。

(四) 関連する国学・神道関係人物の一次資料の調査とデータベース上の国学・神道関係人物の基礎的データ収集のため、中部・東海地方の資料館を対象として出張を行う。

二. 国学・神道関係人物のデータベースの拡充

(一) 前年度に引き続き、「國學院大學デジタル・ミュージアム」上の「国学・神道関係人物研究情報データベース」の修正・管理を行いつつ、近世中期から明治初年までの国学・神道関係人物を対象として、先行

の目録類や、「国学関連人物データベース」における当該項目を調査・確認する。また、先行研究の調査・整理を行う。

(二) これらの調査に基づき、データベースの項目を作成し、順次アップロードしていく。

三. 国学研究のネットワークの拡張
(一) 月に一、二回を基本として、定

例の国学研究会・社家文書研究会を開催する。国学研究会では学内外から国学・神道を中心とする日本研究の若手研究者の参加を募り、各自の研究発表を行う。また、前述一

(一) (二)における研究成果の発表と検討も行う。社家文書研究会では近世・近代の国学・神道に関する一次史料の読解を行い、参加者の史料読解能力の向上も目指す。

(二) 「国学研究プラットフォーム公開レクチャー」として、学内外の国学研究者を招き、それぞれの専門分野の見地から、国学研究の最新状況に関する講演を行ってもらおう。このレクチャーは一般に向けて公開し、またそこで得られた知見を上記の学説史・研究史整理と国学史像の再構築に反映させていく。

(三) 前年度に開設した「国学・神道・日本宗教フォーラム」の管理と運営を行う。SNSの機能も活用しながら国内の国学・神道研究に関する情報を日英両言語で発信する。

(四) 過去の日本文化研究所における国学・神道研究の成果をアーカイブ化し、上記のウェブフォーラムなどを通じて国内外に発信する。

(五) 研究所全体の催事である本年度の国際研究フォーラムは、神道・国学研究部門が企画と準備を担当する。海外の国学研究者を招聘し、国内外における国学研究の成果の紹介・共有、国内外の視点の相互交流を目的として開催する予定である。

(文責・齋藤公太)

学術資料センター 平成三十一／令和元年度事業計画①② 館蔵文化財の資料化と研究公開 館蔵史資料のデジタル化と研究公開

「館蔵文化財の資料化と研究公開」事業では、昭和三（一九二八）年に考古学標本室を設置して以来、当館が収集してきた考古資料・民俗資料は、既に十万点以上に及び、資料台帳の登録件数も六千件を超えている。これまでの事業では、開館当初から書き継いできた資料台帳のデジタル化、並びに台帳と現有物件を照合する資料確認を進め、外部に移管した資料や、未登録資料の把握に努めてきた。

従前の事業を継承する本事業では、このような館蔵文化財の管理・運用に係る基礎的な作業を継続して実施するとともに、関連情報の一般公開を進め、博物館資料が広く利用・活用されるための前提を整えていきたい。一方、これまで重点を置いてきた基礎作業から、研究公開事業への脱皮を進め、出土遺跡が明確な一括資料の調査研究や、館蔵点数の豊富な特定資料群を対象に、その文化的価値を高めるためのサブプロジェクトを実施し、成果を博物館における展示活動（特別展・企画展・特集展示・相互貸借特集展示）へ反映させていく。

当事業では、資料管理、及び新規受け入れ物件の登録と、未登録物件の概要確認を基幹とする（Ⅰ）資料管理・登録機能を確立し、館蔵資料

を保存・活用するための前提を整えていく。また、館蔵資料を対象とした（Ⅱ）調査研究機能を拡充し、最終的な展示公開を目指した（a）資料研究、（b）テーマ研究、（c）祭祀遺跡研究拠点構築の三部門からなるサブプロジェクトを実施する。加えて、同時に展開する「館蔵史資料のデジタル化と研究公開」事業や、博物館本体と連携した（Ⅲ）情報公開機能として、（a）資料台帳（目録）公開、（b）デジタル情報公開を進めていく。本事業の実施に当たっては、従来通り学部生・大学院生等を雇用し、将来の学芸職員を育成する（Ⅳ）学芸職員実践教育機能を果たしていきたい。

今年度は、館蔵文化財の内、研究上とりわけ価値の高い特定資料群については、重点的な資料研究・テーマ研究を実施していく。そのため、経費の大部分は、膨大な館蔵文化財を適切に取り扱うことができる考古学・民俗学専攻学生等を雇用する人件費となっている。その内、伝統文化リサーチセンター後継事業でもある祭祀遺蹟データベース構築は、祭祀考古学会と連携して実施していく。地域文化財研究に関しては、山梨県埋蔵文化財センター等の協力を得ていく。

また、サブプロジェクトとして資料研究・テーマ研究を遂行するに際して、関連資料や現地踏査を実施する。今年度は中国における旧蔵資料調査を予定している。

「館蔵史資料のデジタル化と研究公開」事業では、（Ⅰ）史資料及び画像管理・登録事業としてこれまで構築してきた画像データベースを基礎として、館蔵史資料及びそのデジタル化情報の保存・管理システムの整備に加え、未だ充分でない未整理資料の実態把握を進めていく。（Ⅱ）調査研究では、サブプロジェクトとして、学史的にも重要でありながら資料化が遅れていた館蔵史資料や、纏まった資料群の調査研究を実施し、その成果を普及事業や刊行物によつて公開するとともに、博物館における展示活動に反映させていく。

（Ⅲ）情報公開事業として、デジタル化資料の増補にあわせて、館蔵史資料画像のデータベース化を進め、「館蔵文化財の資料化と研究公開」事業による成果を含めたWEB上で公開を推進する。（Ⅳ）館史編纂事業では、令和十（二〇二八）年の創立百周年を目前に控えた今、國學院大學博物館の館史関係情報を収集し、昭和三（一九二八）年の考古学標本室創設から今日に至る博物館の発展史を詳らかにする。特に館祖である樋口清之関連資料とその後の発展に寄与した大場磐雄関連資料の収集を行う予定である。（Ⅴ）学芸職員実践教育として、学芸業務を担う臨時職員として学生を任用し、博物館活動の実務を推進する。博物館・学術資料センターの研究・公開事業

と、学部・大学院教育の連携であり、専攻学生の育成や、キャリアデザインに資するものとなる。

本年度は、画像データベースの増補と、これに基づく館蔵史資料管理を行っていくものであり、その十全を期すために未登録資料等の実態調査が欠かせない。加えて、館蔵史資料の内、研究上とりわけ価値の高い特定資料群については、重点的な資料研究を実施していく。加えて、館蔵史資料の再評価に必要なサブプロジェクトを実施する。その内、「社寺等絵葉書研究」では、旧観と現状との比較検討を行うための現地調査を行う。取り扱い資料が膨大であるため、実際に踏査を試みる個別具体的な検討対象は、事業が進捗する中で絞り込んでいきたい。但し、今年度は、資料整理に傾注するため、具体的な資料調査は予定していない。

今年度予定している二つの事業の成果については、個別の学術研究成果や資料紹介については、『國學院大學博物館研究報告』・『研究開発推進機構紀要』等の刊行物で公開していく。また、デジタル化した画像データベースは、「館蔵文化財の資料化と研究公開」事業と連携しつつ、公開の準備が整った部分からWEB上にアップロードする。また、資料研究・テーマ研究の成果は、博物館本事業の中で展示公開すると同時に、関連出版物・イベント等を介して普及を図る。特に、折口・原田・神林資料について、研究を推進してゆく予定となっている。

学術資料センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画③ 神道祭祀・儀礼の研究と展示公開

はじめに

研究事業「神道祭祀・儀礼の研究と展示公開」(以下、本事業)は、本学所蔵の学術資産を活用しつつ、祭祀や祓といった神道に関わる儀礼に注目し、研究を進めようとするものである。

あわせて、学術資料センター(神道資料館部門)(以下、本部門)がこれまで進めてきた神道に関する資料の収集、整理、研究を続ける。

平成三十年度の研究成果

・刊行物・研究発表

本事業の成果として、『資料でみる大嘗祭』(國學院大學学術資料センター)を刊行し、岡田莊司「神道と大嘗祭」、笹生衛「大嘗祭の構造と歴史的背景―古代の大嘗祭・大嘗宮の実態と原形を中心に―」、塩川哲朗・木村大樹「資料から見る大嘗祭」を収めた。「資料から見る大嘗祭」は、本学の学術資産を示しつつ、大嘗祭の流れを紹介したものである。

ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所と國學院大學古事記学センターが共催して二〇一八年九月二十日にライシャワー日本研究所で行ったワークショップ「古代日本の神話と儀礼」では、大東と木村大樹 P D 研究員が口頭発表「Daigosai and Kokugakuin University

Collections」を行った。

・展示

平成三十年度、本事業の中心となったのは企画展「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」(平成三十年十一月三日〜平成三十一年一月十四日)及びそれに関連する特集展示「祈年の法会と神々」(同前)、特集展示「舞楽」(平成三十年九月十五日〜十月二十八日)である。これらの詳細については、『國學院大學研究開発推進機構ニュース』二四号(平成三十一年二月)に詳述したので、そちらを参照していただきたい(「國學院大學博物館 企画展「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」文責・筆者)。

前記以外の主な展示としては、次の二つの特集展示がある。

・「最後の天下祭―文久二年の山王祭―」(平成三十年五月二十六日〜六月二十六日)

・「色と文様―朝廷に納められた色鮮やかな装束の控裂」(平成三十年六月二十七日〜七月八日)

「最後の天下祭―文久二年の山王祭―」は、平成三十年六月に行われた山王祭(日枝神社(永田町))にあわせて行ったものであり、文久二年(一八六二)の山王祭をテーマとした。展示資料は、『山王御祭礼番附』(文久二年)(國學院大學図書館蔵)、「新材木町附祭礼」(國學院大

學博物館蔵)ほかである。

この展示にあわせて武蔵大学福原敏男教授とともに、『最後の天下祭―文久二年の山王祭―』(國學院大學博物館・福原敏男、國學院大學博物館)を刊行した。同書には『山王御祭礼番附』(文久二年)(前掲)、『山王御祭礼番附并附祭芸人練子名前帳』(東京都立中央図書館 特別文庫室蔵)の翻刻、福原氏の論考「最後の天下祭―文久二年の山王祭―」等を収めた。

「色と文様―朝廷に納められた色鮮やかな装束の控裂」では、本部門が所管し、再整理を進めている「高倉家調進控裂」を展示した。これは、本学の和装 D A Y に合わせたものである。

本年度の計画

本年度は、本事業の最終年度である。本部門では、研究成果のまとめと、次に挙げる國學院大學博物館における展示及び関連事業を行う。

五月一日のご即位に合わせて「即位礼」(四月二十七日〜五月二十六日)を開催し、「御即位図」「御即位式図」(國學院大學博物館蔵)「光格天皇御讓位次第」(國學院大學図書館蔵)等を展示した。また、続けて「夏越祓」(五月二十八日〜六月二十三日)を行い、國學院大學で行う大祓式の用具などを展示した。祓

に関わる本研究事業の成果として『祓の信仰と歴史』を刊行する。

大嘗祭に関しては、企画展「大嘗祭」(十一月一日〜十二月十五日)の展示準備を進めている。同企

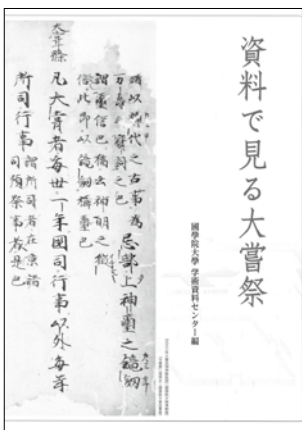
画展は、本学所蔵資料を活用した展示とする予定である。これに先がけて、大嘗祭の概要を英語で紹介した「An Overview of Japanese Enthronement Ceremonies, Based on Ancient Documents, Focusing on Daigosai」を國學院大學博物館及び本部門のホームページで公開した。これは昨年度刊行した「資料で見る大嘗祭」のうち「資料から見た大嘗祭」の要旨を、ハーバード大学ヘレン・ハーデカ教授の多大なる協力を得て英訳したものである。

また、本年度も本学和装 D A Y に合わせた「高倉家調進控裂」の特集展示(近世の上皇さまの御召し物、六月二十九日〜七月二十一日)を神道文化学部や國學院大學博物館と共にする。この展示では、本学学生が外国人に狩衣を着付ける行事も行う。

このほか、宮地直一コレクションの整理をはじめ、本学の学術資産の整理・研究を継続し、國學院大學博物館神道展示室において、その成果を公開する。

(文責・大東敬明)

資料で見る大嘗祭



校史・学術資産研究センター 平成三十一年／令和元年度事業計画① 國學院大學における大学アーカイヴズ体制の基盤整備

研究事業の目的と概要

「國學院大學における大学アーカイヴズ体制の基盤整備」研究事業（以下・本研究事業）は、自校史に関する学術研究を行い、その遂行の基盤となる大学アーカイヴズ体制の更なる整備をなすことを目的とする。

また、本研究事業は、平成二十九年に策定された「二十一世紀研究教育計画（第四次）」に明記される「校史および貴重史料の整備と、それを活用した調査・研究・教育の推進」及び「校史学術資産デジタルアーカイブ」の具現化を図るものである。

具体的には、自校史研究を行う基盤整備として、①「資料の収集、整理及び展示」、②「研究成果の公開及び本学の教育活動への支援」を推進する。

①については、校史資料の整理を通して校史資料簡易目録の作成を継続して行うことで、校史資料のレファレンスを可能とする環境整備を進める。また、同資料収集・整理は、周年事業（年史編纂事業等）に備えたアーカイヴズ体制の基盤強化とする。資料の展示については、本学博物館との協働により、常設展示（校史展示室）に資料整理の成果を還元する。

さらに、校史資料の整理・保存・活用の一環として、公開・閲覧を視野に入れた外部委託による資料のデ

ジタル化を行う。

②については、(1)共通教育プログラム「神道と文化」サブテキストの改訂と当該教材に関するアンケートの集計・分析、(2)本学博物館における常設展示・特集展示・企画展示を通じた事業成果の公開、(3)「國學院大學 校史・学術資産研究」（本センター紀要）及び「校史」（本センター一般向け冊子）における事業成果の発信を軸に、研究成果の社会還元と教育での活用を推進する。

前年度の研究成果

平成三十年度は、前記の自校史研究の基盤整備を進めるとともに、下記の結果公開を行った。

まず、本学博物館における展示として、①特集展示「教派神道と皇典講究所・國學院大學」（平成三十年五月二十六日～七月八日）、②特集展示「有栖川宮家・高松宮家ゆかりの新収蔵品展」（平成三十年十月五日～十月二十二日）を行った。

次に、平成二十八年度の成果刊行物『國學院の古典学』（平成二十九年三月）を増補改訂して刊行した。これは本センターの校史研究部門と学術資産研究部門の両部門の研究成果を融合させたもので、既に掲載していた「古事記」「日本書紀」「万葉集」「源氏物語」及び和歌に関する

国学・本学の学問史に加え、自校史の概要及び年譜、「延喜式」の国学・

本学の学問史に関する事項を増補した。これにより本学の沿革を踏まえ、近世国学から連なる本学の学問史を幅広い視点から一覧できる書籍として研究成果を社会一般に還元するとともに、併せて本センター両部門の研究成果を有機的に結びつける試みとした。

さらに、平成二十九年年度から広報課との連携により「國學院大學学報」に連載してきた「学問ノ道」では、飯田町から渋谷への校地移転や戦後の新制文学部設に関わる事項、人物では武田祐吉、樋口清之、山田顕義、石田幹之助、折口信夫等について紹介し、教職員、学生をはじめ院友といった幅広い層へ自校史を発信した。

他方、「資料の収集・整理」については、学内外からの自校史に関する問い合わせに対応するとともに、資料寄贈の対応を行った。また、収蔵庫内の校史資料については、前年度に引き続き集中的な整理を行い、新たな校史資料の目録作成を継続して行っている。

なお、校史資料のデジタル化については、本センター所蔵音声テープ（入学式、周年事業、教員講演録等）一二七点、國學院大學校史資料課編『國學院大學百年史』上・下巻（学枝法人國學院大學、平成六年）のデジタル化を実施し、今後の年史編纂事業への便に供するための基礎資料とした。

最後に、「教育活動への支援」については、共通教育プログラム「神道と文化」サブテキストである本セ

ンター編『國學院大學の歴史』（教育開発推進機構共通教育センター発行）に関するアンケートを関係機関・部署と共同で実施した。

本年度の事業計画

校史資料整理については、本年度中に本学の内部資料として閲覧することができ、「校史資料簡易目録」としての完成を目指す。また、平成三十年度に新たに収蔵した有栖川宮家資料についての調査・目録作成を開始する一方で、随時本学博物館において展示公開する。

上記の資料収集、整理、研究、成果公開を継続して行うほか、校史資料のアーカイヴズに関する研究会を開催することで、本学の自校史に関する情報の共有し、その研究内容の深化を図る。そこで得られた成果は、本学博物館における常設展示や特集展示、展示品解説シートの作成・配布を通じて、随時公開していくとともに、本センターの教員・研究員が担当する授業等での一部活用も行う。

また、『学報』における「学問ノ道」の連載を継続することで、広く教職員・学生・院友に向けて自校史を認識する機会を提供する。

なお、本年度も大学アーカイヴズのデジタル化を目指し、引き続き外部委託による校史所管資料のデジタル化を行う。

（文責・渡邊 卓）

校史・学術資産研究センター 平成三十一／令和元年度事業計画② 國學院大學における学術資産研究の可視化

事業の目的と概要

「國學院大學における学術資産研究の可視化」研究事業（以下・本研究事業）は、本学の学術資産を調査・研究し、学術資産の研究を深めるとともに、その研究成果を可視化して、広く社会に還元することを目的とする。

本研究事業は、本センター研究事業のうち、「本学所蔵の学術資産に関する研究」、「資料の収集、整理及び展示」、「折口博士記念古代研究所並びに河野博士記念室及び武田博士記念室に関する資料の研究」の分野を担いつつ、平成二十九年四月に策定された「二十一世紀研究教育計画（第四次）」に示される「校史および貴重史料の整備と、それを活用した調査・研究・教育の推進」、「学術資産の活用」に基づき、研究事業を推進する。

具体的には、國學院大學図書館と連携しつつ、本学が有する学術資産を研究し、その価値を見いだす。また、貴重書以外の特殊文庫にも注目して、河野省三、武田祐吉、宮地直一を始めとし、本学にゆかりの深い人物が所蔵していた資料について、①資料そのものの価値、②伝来、③本学との関わりの3点から研究することにより、それらがどのように研究利用され、継承され、活用されてきたのかを明らかにする。これにより学術資産を校史及び研究史に結び

付ける試みを行う。

これらは、本学の学術資産およびその研究成果（「本学固有の価値」）を内外に発信するための基盤整備の一環であり、研究者による高度な学術資産の活用と本学の教育活動での活用といった、すそ野の広い成果が期待され、研究と教育とを有機的に結び付けることが可能となる。

以上の活動を通じて得られた新たな知見は、本センターの紀要である『國學院大學 校史・学術資産研究』や一般向け冊子である『校史』に発表するとともに、自校史教育の場での活用を試みる。また、博物館における展示を通して、学術資産及び研究成果を発信し、校地・渋谷をはじめとする社会へ還元する。

前年度の研究成果

本研究部門における学術資産研究の成果の社会還元は、本学図書館デジタルライブラリーや本学博物館展示を通して実施している。

まず、本学図書館デジタルライブラリーについて本年度は、『南都興福寺文書』（四巻 十八点）、『古今集遠鏡』（巻第十四、本居宣長草稿本）の他、令和元年十一月に発行される大嘗祭関連資料として『大嘗会供神膳秘説』、『大嘗会式画図』、『大嘗会式画図』、『大嘗会御記』、『大嘗会之記』、『大嘗会雑記』といった典籍・資料に関する解説や書誌、

写真データを本学図書館との協働により、デジタルライブラリーに掲載した。

次に、本学博物館における本学所蔵学術資産の展示について本年度は、来年度に予定している本学博物館における展示の準備期間とした。具体的内容については「和歌関連資料」「中世文書」「近世文書」を予定し、各担当研究員を配置して資料の調査・研究を進めた。

また、本研究部門の課題としていた校史研究部門との連携については、『國學院の古典学』の増補・改訂に際して、校史の通史や略年譜を付すことで、校史研究と学術資産研究の一層の融合を図った。

本年度の実施計画

本年度も引き続き、本学図書館デジタルライブラリーの充実を図るとともに、博物館校史展示室において、貴重書をはじめとする学術資産の研究成果を用いた企画展や特集展示を行う。

博物館展示については、企画展「和歌万華鏡―万葉集から折口信夫まで―」（平成三十一年四月二十七日～令和元年六月二十三日）を既に開催するとともに、特集展示「覇者たちの中世」（令和元年六月二十九日～令和元年八月二十五日）、さらに近世文書に関する特集展示（令和元年十一月一日～令和元年十二月十五日）を計画している。

本事業の進捗や成果については、博物館における展示のほか、各年度に発行する『國學院大學 校史・学

術資産研究』や『校史』において報告する。

なお、本年度からは広報課との連携により、「未来につなぐ学術資産研究ノート」を本学『学報』の新連載として開始した。この連載は、本学教員及び研究員が本学所蔵の学術資料を紹介し、本学の研究や校史、学術資産への理解促進をはかるとともに、研究・教育、ひいては本学のブランド力向上に資することを目的としている。この連載が開始されたことにより、「二十一世紀研究教育計画（第四次）」に示された戦略1「社会は、國學院大學が持つ固有の価値を評価し、学生・卒業生は、大学に誇りを持つている。」に対して、より一層寄与できるものと考ええる。

（文責・渡邊 卓）



『國學院の古典学』

研究開発推進センター 平成三十一／令和元年度事業計画① 研究開発推進センター研究事業

文部科学省二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」（COE事業・平成十四年度～十八年度）における拠点機能を継承・発展させるべく、平成十九年四月、研究開発推進機構は発足した。COE事業は、建学の精神・理念のより一層の闡明・明確化を目的とする國學院大學二十一世紀研究教育計画の中核となる重点的施策として推進された事業であり、本研究事業は、そのCOE事業を継承し、神道・日本文化の研究をさらに発展させることを目的として、院友神職会をはじめとする神社界からの指定寄附金等の外部資金を基に実施される。

本年度は、「(一) 近代の神道及び神職・国学者に関する研究」、「(二) 神道・国学に関する学内資料の調査・研究」、「(三) 伝統文化・神社・地域と共存社会の研究」、「(四) 私立大学研究ブランディング事業「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―」推進のための実務的運営」、「(五) 霧島神宮の研究」、「(六) 北海道神宮の研究」、「(七) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化」、「(八) 研究開発推進センター研究会の実施」、「(九) 『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』の刊行」の各事業を実施する。

前年度の成果と本年度の計画

(一) については、平成二十八年以降、資料調査、研究会、『研究開発推進センター研究紀要』への成果発表などを実施してきた。本年度も引き続き、調査・研究を進めるとともに、成果論集として『近代の神道と社会（仮）』を令和二年一月に刊行するべく、研究報告会を開催し、執筆・編集作業などを進めていく。なお、同論集は、明治維新の理念である神武創業の始に基づく祭政一致の構想を根幹として展開した近代神道の諸相を明らかにすることを目的に、制度・組織・人物等の多様な観点から「近代の神道と社会」を検討することを刊行趣旨とする。

(二) については、前年度に引き続き、本センター研究事業全般に係る神道・国学に関する書籍・雑誌を対象として、資料の調査・研究を実施する。

(三) については、前年度、二回の公開研究会を開催するとともに、東日本大震災被災地の復興に関する調査、公開研究会記録の編集作業（『研究開発推進センター研究紀要』第十三号に掲載）などを実施した。本年度も引き続き、「共存社会の構築」をテーマとして、東日本大震災被災地の復興調査を進めるとともに、特に伝統文化や神社・地域を対象とする研究を中心として推進する予定である。

(四) については、前年度に引き

続き、私立大学研究ブランディング事業「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―における年次計画に基づき、円滑な事業推進、運営を実施する（同事業の成果報告、事業計画などについては、本誌十一頁参照）。

(五) については、前年度、資料調査、研究会を実施するとともに、霧島神宮誌編纂委員会事務局（霧島神宮）と連携し、編纂委員会における意見調整、『霧島神宮誌』に係る執筆・編集作業などを進めた。本年度は、『霧島神宮誌』を本年十月までに刊行することを目的に、執筆・編集作業を進めていく。

(六) については、前年度、北海道神宮及び札幌まつりの歴史に関する資料の調査・研究を進めた。本年度は、北海道神宮御鎮祭百五十年及び第四百四十回札幌まつりを記念する書籍として、北海道神宮及び札幌まつりの歴史を史的に捉えることを目的に、本年九月までに刊行する『札幌まつりと北海道神宮の歴史』に係る執筆・編集作業を進めていく。

(七) については、前年度、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所へ、武田幸也助教を派遣し（平成二十九年四月～平成三十一年三月）、研究交流をおこなうとともに、明治神宮国際神道文化研究所との研究交流、明治聖徳記念学会との共催公開シンポジウム、神道文化会との共催公開講演会などを実施した。本年度も引き続き、研究者間の連携強化に努めるとともに、神道文化会公開講演会「皇位継承儀礼を考える」（六月二十二日）、

明治聖徳記念学会公開シンポジウム「戦後の神社神道」（七月十三日）などを共催事業として実施する。

(八) については、前年度、「近代の神道及び神職・国学者に関する研究」に係る成果発表を中心として、研究会を計六回実施した。本年度は、成果論集『近代の神道と社会（仮）』の執筆者による研究報告を中心として、随時研究会を開催し、議論を深めていく。

(九) については、前年度、本センター研究事業の成果刊行物として、宮本誉士「霧島神宮の近代―官幣大社列格及び勅祭社昇格運動の経緯―」、黒岩昭彦「八紘一字」から「八紘為宇」へ―文部省・教務局・国民精神文化研究所の「転換」―、半田竜介「岩倉具視の国葬と神葬祭」、神杉靖嗣「松代藩士長谷川昭道の思想―神観と皇道を中心に―」、河村忠伸「神道青年全国協議会による大嘗祭前の大祓の歴史的意义―「神社神道」の本質を考えるための一事例として―」、東郷茂彦「皇統一系についての一考察―その伝統の本質を求めて―」、冬月律「過疎地神社の現況と氏子意識―高知県旧窪川町の神社と氏子の調査―」、秋野淳一「企業の参加と都市祭りに関する一考察―東京の神田祭・山王祭・渋谷の祭礼を中心に―」、「研究会記録」平成二十九年共同学公開研究会「復興・伝統文化と地域の自立性」を掲載する第十三号（平成三十一年三月）を刊行した。本年度も引き続き、第十四号（令和二年三月）を編集・刊行する予定である。

（文責・宮本誉士）

研究開発推進センター 平成三十一／令和元年度事業計画② 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 渋谷の都市形成と再開発に関する研究

事業の目的

本事業は、平成十三年の本学創立百二十周年記念学術関係事業を契機として発足した「渋谷学研究会」を基盤として、研究開発推進センターのマネジメントにより実施してきた研究事業の蓄積を活用し、渋谷の都市形成と現在進行中の再開発事業を焦点として、渋谷駅前地域の商業施設や商店街、渋谷川、さらには広域渋谷圏と称される地域（原宿駅、表参道駅、恵比寿駅、代官山駅周辺）などにも着目し、当該テーマに関する諸相を検討する研究事業である。平成三十年からの三カ年計画で実施する本事業は、本年度で二年目となる。当該テーマの検討に当たっては、その基盤となる関連資料の収集・整理をおこなうとともに、本学が擁する歴史学・地理学・民俗学・経済学・宗教学などの各研究分野からの総合的かつ学際的な検証に基づき、渋谷の都市形成過程を動態的に把握すること、「共存社会の構築」を考えることを目的とする。

前年度の成果と本年度の計画

前年度は、歴史学・地理学・民俗学・経済学・宗教学等の各学問領域における資料の把握及び収集・整理を主たる目的とする基礎的調査を実施するべく、渋谷の都市形成と再開発に関する資料の把握及び収集・整理を実施した。具体的には、渋谷関

係図書の日録作成、「渋谷区ニュース」、「統計渋谷」、住宅地図の収集などをおこなうとともに、これまでの研究事業において収集してきた資料の日録作成なども実施した。また、当該テーマに係る収集資料の整理・検討をおこなう際の資料となる「渋谷年表(仮)」の作成に着手し、資料を時系列で把握するべく努めた。そのほか、渋谷駅前再開発によつて変貌を遂げる渋谷川（稲荷橋、氷川橋）、渋谷駅東口、スクランブル交差点、渋谷中央街、桜丘町などのエリアを中心に現況を写真撮影して記録する「渋谷定点観測」を実施し、渋谷の再開発に関する資料として収集・整理する作業を定期的におこなった。

また、当該テーマに関する公開研究会を二回開催した。平成三十年第一回渋谷学研究会は、「銭湯と渋谷―移住者の都市形成史―」（平成三十一年二月二十三日開催）と題して、江戸時代からの居住者を上回る数の移住者が渋谷に定着し、都市化を促していったことに着目。都市への移住者たちが血縁・地縁に基づく同郷者集団を形成し、新天地に根づいた典型である北陸地方出身の「銭湯」経営者の事例などを掲げながら、都市生活者に入浴の機会を提供した「銭湯」をテーマとして、歴史学・民俗学の双方から分析することを目途に掲げて開催した。当日は、

山口拔氏（福島県立博物館）、吉田律人氏（横浜開港資料館）、羽毛田智幸氏（横浜市歴史博物館）による個別報告、谷口貢氏（二松學舎大学）、服部比呂美氏（國學院大学）によるコメントの後、「銭湯」の事例から渋谷と東京の都市形成史を見る意義をめぐって議論が為された。また、平成三十年第二回渋谷学研究会においては、「明治神宮と表参道・渋谷の百年―「伝統」と「未来」を考える―」（平成三十一年三月十一日開催）と題し、明治神宮の創建から現代に至るまでの歩みを振り返り、今後の表参道・渋谷を考える際の参考となる先人の足跡を明らかにすることを目的に、今泉宜子氏（明治神宮国際神道文化研究所）に研究報告を頂いた。

その他、内部研究会として、國學院大學図書館所蔵「鍋島家松濤事務所旧蔵鍋島家地所関係資料」をはじめ、これまでの研究事業において収集した松濤関係資料を整理・分析し、松濤地区の形成を学際的に検討する松濤研究会を発足させ、打ち合わせ会、研究報告会等を実施した。

また、当該テーマに係る刊行物として、『ブックレット渋谷学01』（平成三十一年二月）を刊行し、本事業の成果を社会還元した。第一部には、オムニバス形式の学部授業「國學院の学び（渋谷学）」における山口堪太郎氏（東京急行電鉄株式会社）「渋谷文化」と駅周辺再開発、西樹氏（シブヤ経済新聞）「シブヤ経済新聞と渋谷」の授業記録、第二部には、渋谷をテーマとするコラム、第三部には、渋谷定点観測の記録を収録した。第二部に収録したコ

ラムは、上山和雄「渋谷学松濤研究会の発足」、手塚雄太「渋谷区の誕生」、吉田律人「銭湯と渋谷―都市移住者の視点から―」、伊藤新之輔「江戸の花見と金王桜」、服部比呂美「作家・平岩弓枝と代々木八幡宮―作家の原風景―」、黒崎浩行「防災が紡ぎ出す渋谷の人々のつながり」、飯倉義之「渋谷、都市伝説に浸る街」、秋野淳一「東京渋谷の小さな神々―再開発と宗教をめぐると一つの画期―」の八本である。その他、平成二十九年渋谷学研究会記録「民俗芸能の舞台講演―その歴史・意義―」及び研究論文を収録する「都市民俗研究」第二十四号（平成三十一年二月）を刊行した。

本年度は、前年度に引き続き、当該テーマに関する資料の把握及び収集・整理、「渋谷年表(仮)」の作成、渋谷関係図書及び収集資料の日録作成、渋谷定点観測を実施するとともに、渋谷学研究会、松濤研究会をそれぞれ開催する予定である。加えて、「渋谷を科学する」をテーマとするオムニバス形式の学部授業「國學院の学び（渋谷学）」（令和元年度後期）を開講し、研究成果を教育に還元する。

また、本年度の成果刊行物として、前年度実施した「銭湯と渋谷―移住者の都市形成史―」、「明治神宮と表参道・渋谷の百年―「伝統」と「未来」を考える―」の研究会記録、渋谷をテーマとするコラム、渋谷定点観測の成果などを収録する『ブックレット渋谷学02』を編集・刊行し、本事業の成果を社会還元する予定である。

（文責・宮本誉士）

古事記学センター 平成三十一 / 令和元年度事業計画
 「古事記学」の推進拠点形成
 —世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的な研究・教育・発信—

事業の目的と概要

本事業は、平成二十八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」(タイプB・世界展開型)に、「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的な研究・教育・発信―が選定されたため、設置した古事記学センターを中心に展開する事業である。本事業の目的は、本学で皇典講究所の創立以来、継続してきた『古事記』研究を継承・発展し、成果を教育に還元することで、本学が世界と次世代に『古事記』を語り継ぐ独自の拠点となり、新たな文化の創造と発展に寄与することにある。

平成三十年度の事業報告

昨年度は、五カ年計画の中間総括にあたる年であり、中間総括国際シンポジウムの開催を軸に事業を推進した。同シンポジウムは、宮崎県の共催、西都市・宮崎県神社庁の後援で、平成三十年十一月三日、「古事記と『国家』の形成―古代史と考古学の視点から―」と題し、宮崎県立西都原考古博物館にて開催した(詳細は本紙前号十頁を参照のこと)。そのほか、以下の事業を実施した。
 ・外部機関と連携した学際的・国際的ワークショップ
 ・外部機関・企業と連携した各種イベントの開催

・データベースの拡充
 ・『古事記』入門書の刊行
 ・『古事記』関連アプリの公開
 ・『古事記』の英訳作成と公開
 ・成果論集『古事記学』第五号刊行
 ・中間評価のための報告書作成
 ・なお中間評価のための報告書は、文部科学省による事業支援期間の見直しのため作成を見送り、単年度の事業報告書とした。事業内容の詳細は「平成三十年度事業報告書」を参照いただきたい。

本年度の事業計画

文部科学省による支援期間の見直しのため、本年度が最終年度となるが、申請時の計画に従って事業は、推進する(尚、支援終了後の一年間は大学事業として継続予定)。

本年度の目標は、「中間評価に基づく『古事記』研究の深化と教育システムの構築」であるが、本事業独自の自己点検・外部評価を、文部科学省の「中間評価」に置き換え、事業を推進する。具体的な柱は以下の三点である。
 〈研究〉 国際的な比較研究の推進
 〈教育〉 教育実践の本格的開始
 〈発信〉 博物館連携による『古事記』関連展示の実施
 右は、以下に掲げる個別の事業計画を推進することで達成を目指す。
 ① 国際シンポジウムの開催。

「伝統文化の継承」をめぐる国際シンポジウムを二週に亘り開催予定。
 ② 外部機関と連携した学際的・国際的ワークショップの開催。
 九月に中国・南開大学外国語学院、十一月にアメリカ・ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所と連携した国際ワークショップを行う。また、来年二月に本学日本文化研究所と共催の国際ワークショップも開催予定である。

もなる博物館展示は、考古資料に焦点を当て、令和二年一月下旬に行う予定である。同展示で陳列する考古資料は全て写真撮影をし、画像データ化の上、キャプションとあわせて「器物データベース」として、公開中の「古事記研究データベース」に組み込む予定である。
 また過年度より継続して実施している以下の計画も推進する。
 ・ポスドク研究員等の雇用。
 ・学内定例研究会の実施。
 ・『古事記』関連資料収集とデジタル化。

③ 外部機関・企業と連携した各種イベントの開催。
 古事記アートコンテンツや展示を通して、各種団体と連携予定。
 ④ 『こども古事記』試用版のWeb公開と試用版に基づく授業実施。
 現在作成中の『こども古事記』を用いた事業実践を行う。

・自己点検・評価、外部評価の実施。
 ・『古事記』関連レファレンス環境の整備。
 ・関連団体と連携した講演等の開催。
 ・『古事記』関連の特集展示。
 ・『古事記』絵画コンテンツの開催。
 右計画のうち、「古事記」絵画コンテンツの開催は、第三回古事記アートコンテンツとして大学生(大学院生、専門学校生含む)、昨年新設された高校生の二部門で開催予定(昨年度は両部門で三三七点の応募)。高校生新聞社を窓口とし、令和元年七月一日から作品を募り、日本文化への関心を促す。

⑤ 『古事記』入門書の授業導入。
 谷口雅博センター長の執筆による『古事記の謎をひもとく』(弘文堂、平成三十年四月刊)を「國學院の学び(古事記を諸分野から読む)」(後期開講)にて用いる。
 ⑥ 博物館連携による『古事記』展示。
 本センター作成のデータベースと関連した展示を、令和二年一月下旬に行う予定である。

研究成果の公開について
 本事業の研究成果は、学内定例研究会(全七回)において共有されるとともに、シンポジウムやワークショップを通じて広く一般へと還元する。また年度末刊行の成果報告論集『古事記学』第六号(⑨)にも報告予定である。

⑦ 『古事記』の英訳作成と公開。
 本事業の成果論集である『古事記学』に掲載された『古事記』注釈の英訳を、本年度も継続して作成する。
 ⑧ データベースの更新。
 前年度まで公開済みの各データベースの補填・更新をおこなう。また「器物」データベースを新規作成する。

研究成果の公開について
 本事業の研究成果は、学内定例研究会(全七回)において共有されるとともに、シンポジウムやワークショップを通じて広く一般へと還元する。また年度末刊行の成果報告論集『古事記学』第六号(⑨)にも報告予定である。

⑨ 成果論集『古事記学』第六号刊行。
 右の実施計画のうち、発信の柱と

研究成果の公開について
 本事業の研究成果は、学内定例研究会(全七回)において共有されるとともに、シンポジウムやワークショップを通じて広く一般へと還元する。また年度末刊行の成果報告論集『古事記学』第六号(⑨)にも報告予定である。

(文責・渡邊 卓)

國學院大學博物館

平成三十一—令和元年度事業計画

一. 事業の目的

國學院大學博物館は、建学の精神に基づき、日本文化に関する学術資料を広く調査研究、収集、分類、保管、展示するとともに、学術研究成果の公開・発信を行い、もって研究教育の支援及び社会貢献に資することを目的とする。その目的を達成するため、(Ⅰ) 展示公開、(Ⅱ) 教育普及、(Ⅲ) 環境整備・営繕、(Ⅳ) 運営支援の四つを軸に事業を推進する。

本年度は、右記の事業目的と四つの事業軸に基づき、平成三十年年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策(展示の再構成、多言語化、ミュージアムショップの運営、環境整備)を継続するとともに、二十一世紀研究教育計画(第四次)に示された「学術資産の活用」「社会貢献・地域連携の強化」を推進し、評価指標の達成を目指す。

二. 本年度事業の概要

(Ⅰ) 展示公開

本学の学術資産を活用し、研究成果を本学学生・社会に対して公開するため、次の展示を行う。

(Ⅰ) 常設展示

a. 三つの展示室(考古、神道、校史)において、主に研究開発推進機構内の各機関と協働しつつ実施する。

b. 常時、展示替えを行う。

c. 展示構成、解説などについて、

継続的に改善、変更を行う。

(2) 特別展・企画展

本学の学術資産、研究成果、及び学術的・組織的ネットワークを活かしたテーマ性を有する企画展等を計画的に実施する。また、有機的な連携が可能な外部文化施設・団体等との関係性を活かした日本文化の発信を行うことで、当館及び本学の特徴を広くアピールする。

(3) 特集展示等

前述した企画展と同様の目的と役割を担う小規模な展示を、各展示室や博物館ホールで実施する。

(Ⅱ) 教育普及

研究開発推進機構を含め、本学の研究成果を本学学生のみならず、広く社会に対しても公開し、もって社会貢献・地域連携の強化を行うため、各展示に関連したミュージアムトークやワークショップ、講演会などを実施する。

(Ⅲ) 環境整備・営繕

空気質・温湿度について、正常な状態を維持するための運用を日常的に行い、さらにIPM(総合的有害生物管理)を実施することで、外部から借用する資料を含め、展示・保管資料の保護を行う。

(Ⅳ) 運営支援

ミュージアムショップにおいて、展示に関連する図録・書籍、来館の記念となるグッズ等を販売する。展示観覧後も楽しめる空間として提供

することで、来館者にさらなる展示への興味や理解を深めてもらい、ミュージアム体験の満足度やリピート率の向上を図るとともに、評価・口コミの拡散による来館者増進などの恒常的・波及的効果を狙う。

三. 実施計画

(Ⅰ) 展示公開

(Ⅰ) 常設展

a. 展示替えを行う。
b. 展示構成・解説などの部分的な改善、変更を実施する。

(2) 企画展

本年度は、企画展を六回開催する。

a. 企画展「和歌万華鏡―万葉集から折口信夫まで―」(四月二十七日～六月二十三日)

b. 企画展「新収蔵浮世絵名品選―浮世絵ガールズ・コレクション―江戸の美少女・明治のおきゃん―」(会期：六月二十九日～八月二十五日)

c. 企画展「有栖川宮家・高松宮家ゆかりの新収蔵品」(会期：八月三十一日～十月二十七日)

d. 企画展「大嘗祭」(会期：十一月一日～十二月十五日)

e. 企画展「ANTIQUARIANS」(会期：一月二十五日～三月十五日)

f. 企画展「春の特別列品」(会期：三月二十日～)

(3) 特集展示等

特集展示・季節の展示等を各展示室で実施する。

(Ⅱ) 教育普及

ミュージアムトークを企画展毎に実施し、さらに展示に関連した講演会、小学生以上の子供や日本文化に

興味を持つ外国人を対象とした各種ワークショップを開催し、博物館利用層の拡大を目指す。

(Ⅲ) 環境整備・営繕

展示ケース内の空気質維持のため、ローケースの天板を、より有害物質放出量の少ない素材へ交換する。さらに必要に応じてガス吸着シートの設置・交換、ケース内の換気、インジケータによる環境把握等を行う。また、温湿度測定と評価を定期的に行う。その他、文化財害虫の侵入や、被害を防ぐため、IPMを実施する。

(Ⅳ) 運営支援

ウェブサイト・SNSによる情報発信の推進、多言語による展示解説の充実と発信、各方面への広報活動、ミュージアムショップでの図録やグッズ販売を行い、博物館運営の強化を図る。また、来館者アンケートを分析し、展示や運営の改善を行う。

平成三十年度は、特別展を三回、企画展を四回開催し、年間の総来館者数が七九、三二六人を記録した。本年度は、本学の貴重な学術資産と新収蔵品の公開にも力点を置き、国内外の多くの人々に國學院大學の魅力を伝えることを目指していく。
(文責・國學院大學博物館)



平成31／令和元年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧

◇新規研究事業

* 研究事業代表者

令和元年6月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼担教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	◇デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の研究と教材の国際発信 (H31～33年度)	* 平藤喜久子 星野靖二 齋藤公太 吉永博彰	黒崎浩行 シゲタケツ、エリク 藤澤 紫 ヘイヴンズ、ノルマン	加藤久子 フレ、チャールズ	今井信治 村上 晶	小高絢子 高田 彩	井上順孝 櫻井義秀 土屋 博 ナカイ、ケイト 山中 弘	天田顕徳 カド、イヴ 塚田穂高 野口生也 比佐、サトシ 牧野元紀 矢崎早枝子
	「國學院大學国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築 (H30～32年度)	齋藤公太	遠藤 潤 * 松本久史		間芝志保 丹羽宣子		林 淳	一戸 渉 小平美香 小田真裕 芹口真結子 古畑侑亮 三ツ松誠
学術資料センター	館蔵文化財の資料化と研究公開 (H29～31年度)	内川隆志 深澤太郎	青木 敬 小川直之 大日方一郎 * 笹生 衛 谷口康浩	阿部常樹 菊地大樹 鳥越多工摩	尾上周平			荒井祐介 石井 匠 伊藤大祐 植田 真 奥山 香 北澤宏明 惟村忠志 大工原豊 田口哲也 山口 晃 加藤元康 栗木 崇
	館蔵史資料のデジタル化と研究公開 (H29～31年度)	内川隆志 深澤太郎	* 小川直之 黒崎浩行 吉田敏弘 大日方一郎			石垣絵美 川嶋麗華		石川岳彦 黒田迪子 齋藤しおり 野藤 妙 平本謙一郎
	神道祭祀・儀礼の研究と展示公開 (H29～31年度)	大東敬明 吉永博彰	* 笹生 衛 加瀬直弥 鈴木聡子		木村大樹 塩川哲朗		岡田莊司	
校史・学術資産研究センター	國學院大學における大学アーカイヴズ体制の基盤整備 (H29～31年度)	大東敬明 渡邊 卓 高野裕基	齊藤智朗 * 阪本是丸 戸村 理	荒木優也 田中 潤		大番彩香 齊藤みのり		
	國學院大學における学術資産研究の可視化 (H30～32年度)	大東敬明 渡邊 卓 高野裕基	阪本是丸 矢部健太郎 笹生 衛 加瀬直弥 * 根岸茂夫 野中哲照	荒木優也 高見澤美紀 堀越祐一				遠藤珠紀 金子 拓
研究開発推進センター	研究開発推進センター研究事業	宮本誉士 大東敬明 渡邊 卓 上西 亘 高野裕基 武田幸也	岩瀬由佳 古沢広祐 遠藤 潤 松本久史 太田直之 藤田大誠 加瀬直弥 藤本頼生 黒澤直道 古沢広祐 * 阪本是丸 松本久史 佐藤長門 菅 浩二 武田秀章 谷口雅博 藤本頼生	小山田江津子 神杉靖嗣	半田竜介		赤澤史朗	網谷哲成 河村忠伸 黒岩昭彦 康 成文 小林威朗 坂井久能 佐々木聖使 佐藤一伯 重村光輝 大丸真美 高原光啓 津田 勉 筒井 裕 東郷茂彦 戸浪裕之 中野裕三 西俣先子 冬月 律 森 悟朗 宮澤佳廣 吉田扶希子
	國學院大學21世紀研究教育計画委員会研究事業 「渋谷の都市形成と再開発に関する研究」 (H30～32年度)	宮本誉士 上西 亘 武田幸也	* 阪本是丸	秋野淳一			伊藤新之輔	
	國學院大學博物館	内川隆志 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓 高野裕基 吉永博彰	* 笹生 衛		尾上周平 木村大樹		朱 岩石 古谷 毅 柳田康雄	粕谷 崇 中村 大 中村耕作 安高啓明 山本哲也
古事記学センター	私立大学研究ブランディング事業 (平成28年度採択) 「古事記学」の推進拠点形成 - 世界と次世代に語り継ぐ 『古事記』の先端的研究・教育・発信 -	平藤喜久子 渡邊 卓 上西 亘 武田幸也	青木 敬 齊藤智朗 岩瀬由佳 武田秀章 遠藤 潤 * 谷口雅博 黒澤直道 藤澤 紫 阪本是丸 藤田大誠 笹生 衛 藤本頼生 佐藤長門 松本久史	井上隼人 小野諒巳 キロス・イグナシオ	鶺鴒辰成 高橋俊之			

平成31 / 令和元年度 研究開発推進機構 人事一覽

機構長	武田秀章										
日本文化研究所長	平藤喜久子										
学術資料センター長	笹生 衛										
校史・学術資産研究センター長	根岸茂夫										
研究開発推進センター長	阪本是丸										
國學院大學博物館長	笹生 衛										
國學院大學博物館副館長	内川隆志 及川 聡										
専任教員	教授	内川隆志 平藤喜久子									
	准教授	星野靖二 宮本誉士 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓									
	助教	上西 亘 齋藤公太									
	助教 (特別専任)	高野裕基 武田幸也 吉永博彰									
兼任教員	教授	岩瀬由佳 遠藤 潤 太田直之 小川直之 黒崎浩行 黒澤直道 齊藤智朗 阪本是丸 笹生 衛 佐藤長門 菅 浩二 武田秀章 谷口雅博 谷口康浩 根岸茂夫 野中哲照 藤澤 紫 藤田大誠 松本久史 古沢広祐 ヘイヴンズ, ノルマン 矢部健太郎 吉田敏弘									
	准教授	青木 敬 加瀬直弥 戸村 理 藤本頼生									
	助教	シッケタンツ, エリック 鈴木聡子									
	助手	大日方一郎									
研究員	客員研究員	秋野淳一 阿部常樹 荒木優也 井上隼人 小野諒巳 小山田江津子 加藤久子 神杉靖嗣 菊地大樹 キロス, イグナシオ 曹 咏梅 高見澤美紀 田中 潤 鳥越多工摩 フレーレ, チャールズ 堀越祐一									
	ポスドク研究員	今井信治 鷗橋辰成 尾上周平 木村大樹 塩川哲朗 高橋俊之 間芝志保 丹羽宣子 半田竜介 村上 晶									
	研究補助員	石垣絵美 伊藤新之輔 小高絢子 大番彩香 川嶋麗華 齊藤みのり 高田 彩									
客員教授	赤澤史朗 井上順孝 岡田莊司 櫻井義秀 朱 岩石 土屋 博 ナカイ, ケイト 林 淳 古谷 毅 山中 弘 柳田康雄										
共同研究員	天田顕徳 網谷哲成 荒井祐介 石井 匠 石川岳彦 一戸 渉 伊藤大祐 今泉宜子 植田 真 遠藤珠紀 奥山 香 小田真裕 小平美香 ガイタニデイス, ヤニス 粕谷 崇 加藤元康 カド-, イヴ 金子 拓 河村忠伸 北澤宏明 栗木 崇 黒岩昭彦 黒田迪子 康 成文 小林威朗 惟村忠志 齋藤しおり 坂井久能 佐々木聖使 佐藤一伯 重村光輝 芹口真結子 大工原豊 大丸真美 高原光啓 田口哲也 塚田穂高 津田 勉 筒井 裕 東郷茂彦 戸浪裕之 中野裕三 中村 大 中村耕作 西俣先子 野口生也 野藤 妙 ビュテル, ジャン=ミシェル 平本謙一郎 冬月 律 古畑侑亮 牧野元紀 三ツ松誠 森 悟朗 宮澤佳廣 矢崎早枝子 安高啓明 山口 晃 山本哲也 吉田扶希子 吉田律人										

平成31 / 令和元年度 事務局人事

学術メディアセンター事務部長	及川 聡									
学術メディアセンター事務部図書館担当部長	柴田克之									
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構担当次長	山口輝幸									
学術メディアセンター事務部情報システム担当次長	堀内弘行									
学術メディアセンター事務部情報システム課長	後藤幸雄									
学術メディアセンター事務部図書館事務課長	安達 匠									
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課長	飯塚陽子									
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課 (國學院大學博物館担当)	藤井哲彦 小林 香 小平浩衣 相川由起 平川 大 志水志保 網谷哲成 (学芸員) 佐々木理良 (学芸員)									

彙報

会議

○全体

- ・平成三十年第四回運営委員会、平成三十一年一月十七日(木)十三時三十分～十四時、若木タワー地下一階会議室○二
- ・平成三十年第五回運営委員会、平成三十一年二月二十一日(木)十五時五十分～十六時二十三分、若木タワー四階会議室○五
- ・令和元年第一回運営委員会、令和元年五月九日(木)十五時五十分～十六時四十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成三十年第六回企画委員会、平成三十一年三月十二日(火)十一時～十一時四十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十一年度第一回企画委員会、平成三十一年四月十七日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年第五回人事委員会、平成三十一年二月二十一日(木)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六

○日本文化研究所

- ・平成三十年第六回所員会議、平成三十一年三月六日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十一年度第一回所員会議、平成三十一年四月十日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六

○六

- 学術資料センター
 - ・平成三十一年度第一回学術資料センター会議、平成三十一年四月二十四日(水)十時三十分～十時四十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○校史・学術資産研究センター

- ・令和元年第一回校史・学術資産研究センター会議、令和元年五月二十二日(水)十一時十五分～十三時、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○國學院大學博物館

- ・平成三十一年度第一回國學院大學博物館会議、平成三十一年四月二十四日(水)十一時～十一時十五分、A M C棟地下一階國學院大學博物館事務室

○古事記学センター

- ・平成三十年第三回古事記学研究実施委員会、平成三十一年一月十七日(木)十四時三十分～十五時三十分、若木タワー四階会議室○五
- ・令和元年第一回古事記学研究実施委員会、令和元年五月九日(木)十六時五十分～十七時三十分、若木タワー四階会議室○五

○古事記学センター

- ・平成三十年度第四回国学研究プロジェクトフォーラム公開レクチャー、「国学研究への入り口」生涯学習の観点から、平成三十一年三月四日(月)十八時～二十時、A M C棟五階会議室○六、講師||小田真裕(船橋市郷土資料館学芸員)、コメンテーター||小林威朗(國學院大學兼任講師)、芹口真結子(一橋大学大学院特任講師)

○日本文化研究所

- ・公開研究会「荷田春満の国学と国史学説の再検討」、平成三十年十一月十八日(日)十三時～十七時、A M C棟五階会議室○六、報告者||根岸茂夫(國學院大學教

- 授)、石岡康子、松本久史(國學院大學教授)、一戸渉(慶応義塾大学准教授)、早乙女牧人(東海大学非常勤講師)、中村明裕(宮部香織(亜細亜大学非常勤講師)、司会||渡邊卓(國學院大學助教)
- ・平成三十年度第二回国学研究プロジェクトフォーラム公開レクチャー「国史政治思想史研究の現在」、平成三十一年一月二十五日(金)十六時～十八時、講師||三ツ松誠(佐賀大学講師)
- ・「宗教文化教育に関する研究会」、平成三十一年三月二日(土)十四時～十七時、福岡県福岡市、報告者||飯嶋秀治(九州大学准教授)、井上順孝(國學院大學名誉教授)、滝澤克彦(長崎大学准教授)、中川正法(筑紫女学園大学教授)、デジタル・ミュージアム研究会、平成三十一年二月二十七日(水)十三時～十四時三十分、A M C棟五階会議室○六、講師||桐原健真(金城学院大学教授)
- ・平成三十年度第三回国学研究プロジェクトフォーラム公開レクチャー、平成三十一年二月二十七日(水)十五時～十八時、A M C棟五階会議室○六、講師||林淳(愛知学院大学教授)、齋藤公太
- ・平成三十年度第四回国学研究プロジェクトフォーラム公開レクチャー「国学研究への入り口」生涯学習の観点から、平成三十一年三月四日(月)十八時～二十時、A M C棟五階会議室○六、講師||小田真裕(船橋市郷土資料館学芸員)、コメンテーター||小林威朗(國學院大學兼任講師)、芹口真結子(一橋大学大学院特任講師)

○学術資料センター

- ・学術資料センター研究フォーラム「文化財の活用とは何か」、平成三十一年二月十六日(土)十三時～十六時三十分、五号館五二〇一教室、講師||内川隆志(國學院大學教授)、小川直之(國學院大學教授)、建石徹(奈良県地域振興部文化財資源活用課長)、名草康之(奈良県教育委員会文化財保存課長)、村上忠喜(京都産業大学教授)、松田陽(東京大学大学院准教授)

○研究開発推進センター

- ・平成三十年度第一回渋谷学研究会「銭湯と渋谷」移住者の都市形成史、平成三十一年二月二十三日(土)十三時三十分～十七時三十分、若木タワー地下一階会議室○二、報告者||山口拓(福島県立博物館副主任学芸員)、吉田律人(横浜開港資料館調査研究員)、羽毛田智幸(横浜市歴史博物館主任学芸員)、コメンテーター||谷口眞(二松學舎大学名誉教授)、服部比呂美(國學院大學助教)、司会||手塚雄太(國學院大學助教)、秋野淳一(國學院大學客員研究員)
- ・平成三十年度第二回共存学公開研究会「イリベラル(非自由主義的)・デモクラシーの歴史と現状」ヨーロッパにおける「共存」の動向、平成三十一年三月九日(土)、十四時～十七時三十分、A M C棟五階会議室○六、報告者||佐藤俊輔(日本国際問題研究所研究員)、コメント||藤嶋亮(國學院大學准教授)、磯村早苗(國學院大學教授)、司会||菊田真司(國學院大學教授)
- ・平成三十年度第二回渋谷学研究会「明治神宮と表参道」渋谷の百年「伝説」と「未来」を考える、平成三十一年三月十一日(月)十八時～十九時三十分、五

号館二階五二〇一教室、講師 今泉宜子(明治神宮国際神道文化研究所主任研究員)

出張

○日本文化研究所

・星野靖二・齋藤公太・井上順孝、「宗教文化教育に関する研究会及び調査」のため、平成三十一年三月二日(土)～三日(日)、福岡県福岡市
 ・齋藤公太、「近世・近代の国学・神道関係人物に関わる一次資料調査」のため、平成三十一年三月七日(木)～八日(金)、愛知県西尾市

○学術資料センター

・深澤太郎・藤原正大・石澤茉莉子・武藤駿平、「館蔵美濃須衛窯出土須恵器に関する現地調査」のため、平成三十一年二月十三日(水)～二月十四日(木)、岐阜県各務原市、愛知県名古屋市中一宮市
 ・内川隆志・深澤太郎、「保久良神社境内遺跡の事前調査」のため、平成三十一年三月八日(金)～三月九日(土)、兵庫県神戸市

○研究開発推進センター

・宮本誉士、「霧島神宮所蔵資料調査」のため、平成三十一年一月二十五日(金)～二十七日(日)、鹿児島県霧島市
 ・鹿兒島県霧島市
 ・宮本誉士・渡邊卓・高野裕基、「霧島神宮関連資料調査」のため、平成三十一年二月七日(木)～九日(土)、宮崎県宮崎市
 ・上西亘、「霧島神宮関連資料調査」のため、平成三十一年二月十三日(水)～十四日(木)、宮崎県宮崎市

・古沢広祐・黒崎浩行・高橋雄一、「東日本大震災被災地の復興に関する現地調査」のため、平成三十一年二月二十六日(火)～二十八日(木)、宮城県気仙沼市・南三陸町
 ・宮本誉士・大東敬明、「北海道神宮関連資料調査」のため、平成三十一年三月一日(金)～三日(日)、北海道札幌市
 ・上西亘、「霧島神宮関連資料調査」のため、平成三十一年三月七日(木)～八日(金)、鹿児島県鹿児島市

○國學院大學博物館

・及川聡、「平成三十年年度特別展『神に捧げた刀』運営のための先行事例視察」のため、平成三十一年一月十三日(日)、静岡県三島市
 ・深澤太郎・吉永博彰、「平成三十年年度特別展『神に捧げた刀』実施に係る展示資料の集荷」のため、平成三十一年一月十七日(木)、茨城県鹿嶋市
 ・内川隆志、「平成三十年年度特別展『神に捧げた刀』実施に係る展示資料の集荷」のため、平成三十一年一月十八日(金)、静岡県静岡市、神奈川県足柄下郡箱根町
 ・大東敬明・渡邊卓、「國學院大學博物館特別展・特集展示に関わる調査」のため、平成三十一年三月六日(水)～三月七日(木)、京都府京都市
 ・深澤太郎・吉永博彰、「平成三十年年度特別展『神に捧げた刀』実施に係る展示資料の返却」のため、平成三十一年三月二十日(水)、

茨城県鹿嶋市
 ・内川隆志、「平成三十年年度特別展『神に捧げた刀』実施に係る資料の返却」のため、三十一年三月二十日(水)、静岡県静岡市

○古事記学センター

・石井研士・渡邊卓、「第二回古事記アトコンテスト『団体賞』授与」のため、平成三十一年二月二十四日(日)～二十五日(月)、北海道江別市
 ・渡邊卓・小平浩衣、「第二回古事記アトコンテスト巡回展示撤収作業」のため、平成三十一年三月二十四日(日)～二十五日(月)、宮崎県宮崎市

刊行物

○全体

・研究開発推進機構『機構ニュース』通号二十四(平成三十一年二月二十八日発行)
 ・研究開発推進機構『國學院大學研究開発推進機構紀要』第十一号(平成三十一年三月三十一日発行)

○日本文化研究所

・日本文化研究所『学生宗教意識調査 英語版』(平成三十一年二月二十八日発行)

○学術資料センター

・学術資料センター・國學院大學博物館(考古学資料館部門)『中世和鏡の基礎的研究 分析編』(平成三十一年二月二十八日発行)

○校史・学術資産研究センター

・校史・学術資産研究センター『國學院大學 校史・学術資産研究』第十一号(平成三十一年三月七日発行)

行)
 ・校史・学術資産研究センター『校史』第二十九号(平成三十一年三月六日発行)
 ・校史・学術資産研究センター『國學院の古典学』(平成三十一年三月六日発行)

○研究開発推進センター

・研究開発推進センター『研究開発推進センター研究紀要』第十三号(平成三十一年三月十日発行)
 ・研究開発推進センター『ブックレット渋谷学 01』(平成三十一年二月二十八日発行)
 ・都市民俗学研究会(研究開発推進センター内)『都市民俗研究』第二十四号(平成三十一年二月二十八日発行)

○國學院大學博物館

・國學院大學博物館『國學院大學博物館研究報告』第三十五輯(平成三十一年二月二十八日発行)

○古事記学センター

・國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業・文部科学省私立大学研究ブランディング事業成果報告論集『古事記学』第五号(平成三十一年三月十日発行)

資料紹介

眉庇付冑



三世紀から六世紀にかけての古墳時代には、大王を葬った大型前方後円墳を頂点とする古墳の形態と規模とによって、有力首長と考えられる被葬者や、その母集団の社会的地位付けが明示された。そして、古墳の埋葬施設や、副葬品の埋納施設には、被葬者の佩用品としての必要量を超えた莫大な「財」が納められたのである。これに含まれる鉄製武器・武具は、鉄製であるが故に素材を再利用される可能性もあった中、副葬品に加えられていたため、幸いにして今日に姿を留めることとなった。

帯金式甲冑を製作する技法から影響を受けており、帯金の間を縦長の小札で充填してヘルメット状の鉢となし、その正面に庇を付す。頭頂部には、伏板・管・受鉢が伴う。また、首周りを防護する鑑が3枚附属している。朝鮮半島からもたらされた当時最新の鋳留技法によって部材を連結しており、特に小札の幅が細いことから、5世紀でも比較的早い時期に現れたものと考えられる。

このほか、國學院大學博物館では、関連資料として衝角付冑や小札甲を所蔵しているが、本資料をコレクションに加えることにより、古墳時代における武具のバリエーションを示す幅を広げることができた。

（文責・深澤太郎）